

女子教育に関する一つの考察（第四報）

—鎌倉・室町時代の公家の女子教育—

岡 ヤス子

（家庭科教育研究室）

An Inquiry into the Education of Girls (4th report)

—Kuge's Education of Girls in Kamakura Muromachi Era—

Yasuko Oka

1. はじめに

藤原氏全盛期を迎えた道長は万寿4年7月に没したが、その翌年東国では平常忠の反乱があり、この反乱は、東国を基盤とする武士団成長の一条件となった。さらに畿内には源氏、伊賀・伊勢には平氏が勢力をもち、貴族社会における下剋上の動きが頼通の時代からみえはじめた。平安時代朝廷の権威のもとに支配階級として権力を恣いままにした貴族に代って政治の実権を掌握した平氏もやがて滅亡したが、その頃より古代否定の思想が起り、庶民も権威伝統に対して無関心な挙動に出るようになった世風について玉葉の著者は「宗室之衰、庶民之興、此其時也」と述べている。

源氏は遂に武家の総大将として頼朝が鎌倉に幕府を創設し、それより武家社会を迎えた。（建久3年）一方、鎌倉時代には「庭訓往来」¹⁾などに依っても明らかかな如く、商工業の発展がめざましく、年と共に庶民は経済力をもち、社会的地位を確立していった。平安時代、文化は貴族に依って創造され、都に住む貴族の独占するものであったが、武士並びに庶民の進出した鎌倉時代以後は、平民的文化へ移行の過渡期的状態を呈し、文化の主要な創造者、享受者は所を変えることとなった。かくて権力を失墜した公家であったが、律令制定当初より、官吏の本務は民衆の教化にありと、自ら教化階級をもって任じてきたため、王朝以来の伝統文化を継承し、家元²⁾としての格式をもって伝授してきたことは、打続く戦乱の世にあっても伝統文化を

1) 庭訓往来は室町時代初期、玄恵法印の著作で当時年少者の教科者として用いられた。

2) 学問、芸能とその家元としての公家名は次の通りである。（故実拾要に依）

学問・芸能

祭祀
和歌
文章
明経
明法
算道
書道
卜筮

公家名

吉田・白川
冷泉・二条・飛鳥井・三条西
高辻・防条・五条
船橋・伏原
坂上・中原
三善・小槻
世尊寺・清水谷・持明院
土御門

学問・芸能

神楽
和琴
琵琶
笛
笙
箏
蹴鞠
衣紋

公家名

綾小路
四辻・綾小路・正親町
西園寺・菊亭
大炊御門・徳大寺
花山院
綾小路
飛鳥井・難波
三条・高倉

維持し得たとともに武家からの尊敬と憧憬をも得たのである。一例を室町幕府の主足利義満についてみるに、彼は常に和歌を詠じ、鞠をもてあそび、管絃を奏して公家の遊びにひたり、室町の邸には花の御所を造営し、金閣寺を建立するなど、いずれも公家文化への憧憬ならぬはない。かように時代の情勢は推移したが、頼朝は幕府創設の後も、皇室は主権の存する所、朝廷は名分の存する所と一応したため、公家の願望は、皇室の伝統的権威にすぎり、実権のともなわぬ宮廷の官位とはいえ藤原氏全盛時代に倣い、娘を入内または宮仕えさせ、それによって官位の昇進栄達を得ることであった。そのため、女子の出生を喜び、麗質であることを祈り、よりよき教育により魅力ある女性に育てあげ、さて入内すれば皇子の誕生せんことを祈念した。しかし当時における后妃の政界に対して有した権力は、前代後宮と比較すべくもなかったことは明らかである。

教育は「今日に立脚」し「明日を指向」すべきものであるが、また、過去の既成文化に倣い、これを学ばせようとしたことは従来しばしばみとこである。中世公家の女子教育も平安貴族女性を理想とし、その教育の内容・方法を倣ったことは当時の女子教訓書その他³⁾に明らかで、教育に時代的特色を現わすことは少なかった。この要因を考察するに、桜井秀氏は「鎌倉時代の公家は其時代に対する不平があって、其が现实生活に対する無関心の形態をもってあらわされたものと考え」と述べ、また、鎌倉時代の識者は次の如く教えたとしている。⁴⁾「僧は僧の有るべき様、俗は俗の有るべき様、乃至帝王は帝王の有るべき様、臣下は臣下の有るべきよう也、此あるべき様をそむく故に一切あしき也」と。中世公家は謙讓な超階級的な面をもちつつもなお自己の階級的独自性を棄て切れず、それが教育その他の面に現われたといえるのではないかと考える。それでは、武家社会の確立していった鎌倉・室町時代の公家の女子教育は如何に行なわれたかについ

て研究したので発表する。

2. 研究方法

鎌倉時代より室町時代にかけてみられた多くの教訓書のうち、明らかに公家の女子を対象としたと考えられる代表的な教訓書「乳母のふみ」「めのとさうし」「身のかたみ」を中心に中世公家の女子教育の理想・内容・方法を研究した。「乳母のふみ」は平安期より鎌倉前期の未曾有の転換期を生涯とした「十六夜日記」の著者阿仏尼が娘紀の内侍に書き与えた教訓書。阿仏尼は中流貴族の娘、順徳天皇の皇后安嘉門院に仕え、優雅な生活をしたが、高級貴族との恋に破れ、一人娘を抱いて2年間旅を彷徨し、都に帰って再度安嘉門院に仕えたい。傷心の彼女は和歌に打ちこみ、その結果藤原俊成、定家の名門を継ぐ為家に近づき、やがて父娘程年令差のある為家の後妻となり、為相、為守を生む。為家の死後、先妻の子為氏に代り為相に歌道の家柄を継がせ、為家の遺言による領地の帰属を鎌倉幕府に訴えたが、その紀行文が「十六夜日記」である。夫の死後彼女は現実的功利的な中世鎌倉風の女性としての像を打ち出している。「めのとさうし」は作者不詳なれど室町時代の著と推定され、姫君を諫める教訓を詳細に实际的に述べた書である。「身のかたみ」の著者は巻尾天正8年の奥書により一条兼良といわれ、室町時代の著作であることは確実とされている。兼良は累代摂関家の御曹子として生まれ、公事に通じ、神道・仏書・文学に達し、中世を代表する碩学の人。応仁の乱後の廃虚と化した都を目のあたりにして、悶々の情堪え難く、南都に流遇すること6年に及ぶ。その間に作った歌集「南都百首」の序に「松ならぬ身はなげきのもとをはなれがたし、武士の家にし生れざれば、弓馬の道にたづさわらべきにもあらず、法の師の門をば志せどもいたづらに明し暮し云々」と、逆境を嘆き、宗門に帰するほどの脱俗もできずと悔んでいる。「身のかたみ」では五十箇条の項目をあげて、学

3) 無名草子などにその例をみる。本書は建久年間(1190~1198)の著と考えられている。著者不詳。平安時代の物語および女性の評論書として有名。源氏物語に登場する女性の多くを理想の女性として評価している。例えば「めでたき女」として桐壺の更衣、葵の上、紫の上、明石の上。「いみじみ女」として朧月夜の尚侍、宇治の姉君等をあげている。

4) 桜井秀著「鎌倉時代の風俗」教養及思想の分化第四章京都型思想とその特色による。

問芸能をはじめ、日常生活上の心得を具体的に記述している。権勢衰頹の状態の中で、公家女性としての人格とプライドを失はず、陽にもあてず、風にもあてず、さりとして装束の質入なども珍しからぬほどの経済状態のもとで、愛情深く家庭で指導を受けたことは、「めのとさうし」に「御むすめそだて候こと、十ばかりにもなり候はば、おくふかく人にみせられ候まじ、心もちうらやかに、こえひきく、御そだて候へ」また、「御ありきの事、さいさい候まじ、年に二度ばかりものもふでさせ給て、かろがろしく、さいさい御ありき候まじ候」とあることなどからも推測できるのである。

3. 女子教育の理想

石川謙博士は、古代・中世の女子教育について、「将に結婚すべくして未だ結婚せざる青年期の女子のあるべき姿を教え授けることを主眼とした。従って行儀作法、心の持ちよう、嗜みとしての諸芸諸技と共に、美容法・表情法をも併せ教えるのが常であった」と述べている⁵⁾が、上記三書ともにまず、教育の理想を「心のたしなみ」にありとしている。

(1) 「心のたしなみについて」

「乳母のふみ」に「ろうたくうつくしき人の、そのかたちのうき世に双びなく候とも、心定らずなど候へば徒ら事」。姿貌の美しきことは娘はもちろん、親の立場としても切実な願いであらう。特に有閑無為の貴族社会にあっては、実務的な面の能力はさておき、美しい娘は人も羨み、縁談も多かったと考えられる。その生来の美質をさらに高めるためにこそ教育があるとして、教育の理想・内容を娘に書き与えたと考えられる。心を定めるとは、「心のままなるが、返す返すも悪しき事」であるとし、「たとひひとのいみじう辛き御事候とも」顔色に出し、人にみせることは恥かしいことと考えて「さらぬかほにてはありながら、さすがにうやとは覚えてことずくななるやうに御もてなし候へ」そうすればゆかしさの程が思いやられ敬愛を受けるは必定というのである。喜怒哀楽の感情を生地のまま現さぬよう、包み慎しむがよい。「おいらかに」「う

つくしきさま」に振舞う心が大切というのである。「うれしう御心にあふ事候とも、こと葉に、うれしや、ありがたやなど、おほせごとあるまじく候」「大かたに何事をも御心のうちばかりに思召しわき候へ、あさはかに物などおほせられ候はんは、あしき事にて候ぞ」。どこまでも応揚に、おっとりとして、忍耐強くあるのがよいと教えている。「めのとさうし」には「みめかたちはさる御事なれども、かたちよりは心なんまさりたと待れば、女はこゝろのたしなみをほんどせよとなり」。その心のたしなみとは「おとこ女によらず、心もち大事にて候、ことに女はまず上下によらず、のどやかにらうらしく、おもうことをしのび、あらまほしきをかんにんして、さすがにうきも、またうれしきも、ふかうおもひしりて」。これも、寛容で耐えしのぶ心、すべての事にけじめを考え、折をみて人にも適宜わが心持を伝えることのできる冷静さこそよき人の条件であるとしている。両書ともに浅はかな心を強く戒めていると考えるが、ここで中古人の女性観を源氏物語を通じてみるに、その一つとして一般的に「女心の浅さ」という点が指摘されていると思う。源氏物語「横笛の巻」に、落葉の宮が亡き柏木遺愛の笛を夕霧に託したことを源氏が批判して、「女の心は深くもたどり知らず、しか物したるなり」と、女心の浅さを指摘しているが、両書の著者はこの点を注意しているといえるであろう。「身のかたみ」では、「御心と申は、五たい六こんのたましる、一しんのちゃうじょうなり。何事も正しく、うきもつらきも、おほしめししらせ給ひて、さるは又、おもふ事をいはず、いかにしたしき人なりとも」打ちとけすぎてわが心のうちを知られることは口惜しいことである。「やはらかに、うらうらとした心は、たましるをすふる事かんように候」とある。さらに「女はおとこの仏道をさまたげん為に女となりてきたれるなり、されば経にいわく、たとひ大蛇をみるとも女人をば見るべからず」「我よりいやしきものに見へさせたもふとも、おとこといふものは三世の諸仏の化現にて、賞罰正しく、慈悲の心もっぱらあり、おろかにおもうべからず」と、他の二書に比べ仏教の教義を根底とした条理を述べて教えて

5) 石川謙著「女子用往來物分類目録による。

いる。兼良の別の教訓書「小夜のねざめ」⁶⁾にも「大かた女というものは、わかき時は親にしたがひ、ひととなりてはおとこにしたがひ、老ひては子にしたがふものなれば、我身をたてぬ事とぞ申める云々」と、我を通すことを強く戒めている。三書の著述には年代的隔りはあれど、著者の人物観に共通性を見出すことができる。日常生活において生の感情を表に現わすべきでない。「思し召しわきて」反省のゆとりをもち、これによって感情と知性の交わりをはかり、その知性によってとるべき道を明らかにせよ、と教えていると考える。

(2) 恥、義理について

「乳母のふみ」に「ほねをうづむとも、なをばうづむまじと申事の候へば云々」とあり、「めのとさうし」には「人ははちをしり候へば、よろづを心得候ものなり、いやしきものゝ中にもはちをぞんじ候へば、身のおさまるものなり」と恥を知る必要性を説き、さらに「女も男も、たゞあけくれぎりをおもへば、わが家のみちをたしなみ、人におとるまじく候、よしなきものいひもぎりをしらぬものゝわざ」とし、つづいて、「源氏物語にも紫式部は義理を、ほんとたて候」といい、義理を思えば女は二人の夫の顔を見るべきでない」と訓している。このことは、源氏物語「夕霧の巻」に「ただ人だに少しよろしくなりぬる女の、人二人と見るためしは、心憂くあはつけきわざなるを」と、落葉の宮に対して母御息所が二夫に見えずの掟を守らねばならぬと戒めていることなどを引用していると考えられる。従って、「めのとさうし」の著者は、源氏物語中の「女三の宮」「浮舟」の行為を「かるがるし」と非難している。かように源氏物語を引用する一面で、名を惜しみ、恥を知り、義理を重んずる中世武家の婦道精神の強さを求めているともいえるのではなからうか。さらに「めのとさうし」に「おとこを思ふといふこと、べちにあらず、たれもしたしく思ひおもはでは、そはぬものなり」と、政略結婚も盛んに行なわれた中世武家社会において、なお、女なりとも男に一方的に奉仕や犠牲を強制せず、望ましい夫婦生活は、夫と妻の両者相互の親愛の情を基本とすべきであるとしていると考える。また、次のことも云えるのではないかと

思うのである。武家社会となって京都の公家は悲惨な境遇に陥ちり、男女関係も平安朝時代と同じではなく、武士という新たな要素が加わったため、凡てが意志的で、凡てを腕力で解決しようとする傾向となった。例の高師直は二条前関白の妹を奪ってこれと通じ、その腹に師夏を生ませた。太平記に「太政大臣の御妹と嫁して東夷の礼なきに下らせ給ふ。浅ましかりし御事なり」と、撰閑家にとりては忍び難い耻辱としている。しかもその上、前内大臣冬信がこの師夏の母に艶書を送ったことから師直は激怒して、貞和4年4月冬信の邸宅を焼払わしめている。「月卿雲客の御女などは世を浮草の寄方なくて、誘ふ水あらば打佗ぬる折節なれば、さも如何せん申も止むなき事、宮腹などが其数を知らず、此処彼処に隠置奉りて毎夜通ふ方多かりしかば云々」(太平記)などと記されているを見ても、公家の社会が武士の闖入によって荒され、恋愛も相互の感情など顧みられないことが多くなったということがいえる。「めのとさうし」の著者はこれを嘆き「思ひ思わではそはぬものなり」と強く訴えたのではなからうか。公家の姫君を育てる者の当時の社会風潮に対する抵抗と考えられる。

(3) 嫉妬心について

女の嫉妬心については「御ものねたみの事、女房のだい一の大事にて候、さのみおそろしく、いひはらだてば、家をうしなひ、身をはたすもの也」(めのとさうし)とし、光源氏と紫の上の物語を事例として戒めている。光源氏の夜毎の行為に対する「ひかえめでつましい」態度により源氏の愛情を一段と深めさせた紫の上、源氏の通う女性の一人「女三の宮」のためにさまざまの調度品をも快よく整えた紫の上、「人はかうこそあるべけれ、たゞおそろしくいひはらだつことようなし、こらへ給ふべし」と、円満な人間関係を持続するためには女の嫉妬心を強く戒めている。そうして常に「こらへ給ふ」ことを要請されたのは女性であった。源氏物語にも女故におのれを抑制しなければならぬ深い悲しみを女の立場から述べている。「夕霧の巻」に「女ばかり身をもてなすべき所狭うあはれなるべきものはなし、物の哀れをもをかき事をも、見知らぬ様に引き入り沈みなどすれば、何につけてか世に経るは

6) 一条兼良著、文明の頃足利將軍義政の御台所のために記した教訓書。

えはえしさも、常なき世の徒然をも慰むべき……」と、紫の上の気持を叙している。「めのとさうし」の著者は、女なるが故の心の抑圧を肯定していたと云えるようである。夫に対する心構えについては「もし心ならず、御身よりいやくおぼしめし候人に、御そひ候とも、かまへてかまへて、家のうちにあらんほどはちからなし、さきの世のしゅくえんとなくさめて(略)我はさる人なりといふ色御見せ候はず、いかほどもうちしたがひて御心にはかどを御たしなみ候へ」さなくば、自分自身までいやくみられ残念であると述べている。先にも述べた如く、承久の乱の後、公家は所領を没収され、子女も排斥され、果ては陋巷に落魄の身をさらす者さえあり、「心ならず」も身分階層の低い者との婚姻生活に入った公家の娘も多く、そうした場合の心構えを具体的に教えているのであろう。

(4) 宮仕えの心構えについて

「乳母のふみ」では「おなじみやずかへをして、ひとにたちまじり候へども、わが身のきりやうにしたがひて」自分の能力に従い、周囲の人々と協調してつとむべきで、出すぎて人に取沙汰されるようでは「返す返す心うきこと」であると、穏かに教えている。「めのとさうし」には「御みやづかひ候はゞ、かまへてかまへて、しうのためうしろやすく、心に入りまいらせられ、大事とおぼしめせ、男ならず、をんななりとも、おしうのためには、いのちをもすてんと、おぼしめされ候へ」。武士が主君の恩義に対しては命をも捨てる如く、女も主のために同じ覚悟が必要と、第一報で報告した平安貴族女性への教訓に比べ強い言葉で教えている。「朝夕わかず、御みやづかへあるべし、ちとも御しうのうしろごとを人のいひ候に、さしいらへあるまじく候」主の陰口批判など行なってはいけない。「おっとにも、おしうにも二心だになければ、みやうがありて」人々は尊敬の念をもつてあらうと实际的に懇切に教えている。「身のかたみ」では、「我みやづかへのこうをつまず、うすくしてうらむる心あらば、三ぼうにはなたれて、身のはてあやしきやまひとなりて、浅ましくはつことも有、さやうのことおほく候」と、宮仕えを身の修養としてすすめているのである。平安時代においては、紫式部は中宮彰子に仕え、「白氏文集」なども講義し、清少納言も皇后定子に学芸をもって仕

えた。その他多くの女房は宮仕えによって学問的効をつむことを念じたが、三書とも宮仕えの理想に関しては平安期とは異った理念にたっていると思われるのである。中世において、優れた女流文学者の輩出およびその業績をみることの少なかつた要因の一つはここにあると考えられる。

(5) 人を召し使う心構えについて

公家の女性たちは、多くの人にかしづかれ、上にある者としての特別な心構えや態度について相当な資質が要求されたのは当然である。この点に関して著者はそれぞれ实际的、具体的な注意を与えている。

「乳母のふみ」に「ひたひさしあはせて、御きそくよげに、うちさゝやきたはぶれかはしなどするも、かろがろしく」てよくない、しかも、人には情をかけ、心を向けることが肝要と教えている。また、「召し使ふ人々の中にも、おとなしく、さもありぬべからんには、物をも仰せられあはせ、打頼むように、あたらせ給ふ」がよい。しかし近づき、なれすぎるのはよくないと述べている。「めのとさうし」には「御なさけかけられ、ありつきよくおもふやうに、御あつかひ候へ」「いやしきとてそらみせずして、なさけあることばかけられ候へ、さればとて、またいやしきものにちかづきて、うなずき候な、よき事はいはぬもの也」「げすはものいふことばよりはちめ、ふりふぜい、いやしきに御ちかづき候へば、御身もちもあしくなり候」と、学問のない賤しい召使いに近寄れば姫君を害することになりかねない。従って近づかぬようと貴族としてのプライドを保つ必要を説いている。「たしなみがよい」「学問がある」ということが、如何に人間にとって大切であり、人間性を高めることに役立つと考えていたかを伺い知ることができると思われる。「身のかたみ」では「まず其人をよく御覧ぜよ、心中さりぬ所だにもあらば、あながちさしたるのふなくとも、御心を添へてめしつかふべし」「御じひをもってめしつかふべき也、三ど五どまでのあやまりをば、御心とおぼし召ゆるせ、六ど七どまでのあやまりは、人にもめんじ、ぬしにもたいじゃうをたてさせられよ、あしきとて、又しげんに御用にたつことも有べし」と。公家の権威を保ちつつも、人をゆるす寛容さをもつべしと教えていることは賞讃に値するといえる。この点「めのとさう

し」にも「人はいかほども情おはしませ、慈悲情けにこそ、人はおもひつくものにて候へ、恩ある主には仕へずとも、なさけある主には命を捨てんと思ふものにて候」と。主従関係を重視した当時の世相を反映した具体的な指導と考えられる。三書の他に「十訓抄」⁷⁾をみるに「妻を扱ふには心を主として容に由るべからず」とある。あくまで「心のもち方」を教育の中心とした中世教育のあり方を現代教育のあり方と比較し、反省すべき点があると考えられる。

4. 教育の内容と方法

三書ともに上述の如く教育の理想をまず「心のもち方」にありとして指導しているが、その他の教育内容として、「乳母のふみ」には (イ) 学芸（和歌・手習・絵画・琴・琵琶・読物）について (ロ) 調度品の取扱いの心得 (ハ) 社交上の心得 (ニ) 日常の動作・振舞・云葉づかい (ホ) 薫き物に関する心得 (ヘ) 仏教信仰についてなど述べているが、「めのとさうし」「身のかたみ」には以上のほか (イ) 美しい顔・眉づくり・目つき・口もと・耳・髪かたちのあり方とその化粧法 (ロ) 着物の着装についての心得 (ハ) 姑に仕える心得 (ニ) 人の子に接する心得 (ホ) 遊具・家具・楽器などの置き方並びに床の間の置き物・生花の心得 (ヘ) 硯・反物の差出し方 (ト) すごろく・もの合わせなどの遊戯の心得 (チ) 物見・物詣でなど外出の心得 (リ) 朝・昼・夕の心得 (ヌ) 入浴・掃除などの心得、等些末な点まで行届いた教育内容を記述している。その主な点について述べることにする。「十訓抄」に「さる家の子孫ならずとも芸能を磨きて志す道に達すべし」また、「飢を忍びて道を学び云々」と、学ぶことの必要を述べ、事例として「江口の遊女」や「檜垣の姫」など新古今、後撰集などに選ばれた女性を例にあげ、和歌、文章、手習等の学問をすすめている。不如意の生活にあり、公家の教養は少しづつ衰える傾向にはあったが、十訓抄のこれらのことから公家女性とし、学芸を奨励したことは当然といえるであらう。

(1) 和歌について

阿仏尼は、中流貴族の娘として生れ、早くより和歌の道をおさめ、後、為家の後妻となっただけに、「かまへて歌よませおはしまし候へ、歌のすがたありさま

は、みなふるきにみえて、くでんにしるして候へば、よくごらんじ候へ、たゞ女の歌にはことごとしきすがた候はで、詞たがはず、いとをしきさま、うらうらとありたく候、さればとて、えんあるすがたにのみきとられて、たましるの候はぬも、わろく候へば、十分心得ねばならない。また、「月も秋のさやかなるよりも、冬霜夜にさえわたりて、氷にまがふ色は、心にしめられ、春の花秋のもみぢの、はへばへしき色よりも、霜枯れのぜんさいの、そこはかとなく、枯れゆきて、誰に問はまし秋の名残をと、さながら雪の下に埋もれて、心苦しげなるかれ野などの」自然の風物を心ゆくまで見取り、聴とり、物のあわれを御心に深く感じとるよう努めよと教えている。しかも「古今、新古今など上下のうた、そらにみなおぼえたことにて候」と。かつて村上天皇の女御宣耀院が末だ御娘のとき、父大臣は「古今の歌二十巻をみなうかべさせ結ぶを御学問にせさせ給へ」と教えたと同様に、阿仏尼も歌詠む者の教養として、自発的に古今、新古今を学びとることがのぞましいとしているのである。「身のかたみ」ではさすが博学の兼良だけに、「御歌の事あめのしたに、いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける。まして女の御身においてをや」とし、また、歌について解説して「まずうたと申は、仏たいをあらはし、天地相応じて、出きたる物なれば、歌をよまんとおもふ心、すなはちこれ天也、こころはたねをくだす所、すなはち父也、たねを求めて、うたをあんずる所を則(ち)地といふ、よみいだすは則(ち)母の胎内をいづるが如し、歌のすがたよきはすなはち仏也」。仏教を深く極めた兼良の説である。「どうるいをあまたよみ候はでは、歌と成がたし、しかればしうをよくみるべし」「十二代集のうちとりわき古今集肝要にて候」。兼良も古今集を習い覚える必要をとき、心のおよばん限り五十首も百首も多く歌を詠むことをすすめている。幼い時は「しらずよみ」でもよい、歌に親しむ習慣をつけるがよいとし、「そうじて人のはづかしきと申ては、歌はよまれぬ事に候」と、かつて光源氏が玉鬘に和琴の学習について注意したと同じ言葉をもって教えているのである。「けいこだにもよくしたまひねれば、あながちふぜいをたづねもとめ候はず

7) 建長年間の著作と考えられている教訓書、著者は不詳。庶民の問題もとりあげている。

とも、をのづからいかやうのこともよまれ申べく候」と阿仏尼が季節感を感得することによりよき歌も詠まれるとしたとは異った意見を述べている。「歌をよくよみぬれば、神も仏もなうじうある事と申候」と身の幸のためにも歌をよく詠むべしと、徹底してすすめているのである。

(2) 手習について

桜井秀氏は「少年・少女の教養は少なくとも堂上家庭にみると、男子に比して劣るところはなかったように思われる。後京極撰政良経の息女は五歳で金泥法華経神力品を書写した」と述べておられる。⁸⁾ 平安期と同様中世においても手習いは盛んに学習されたといえる。「乳母のふみ」に「御手などかまへてかまへてうつくしくかゝせ給ひ候へ」「はかなき筆のすさみも、人のほどをしはかられ、心のきはも見ゆることにて候」。文字によって人柄がしのばれるとして美しく書くことの必要を述べている。「まなは女のこのむまじき事にて候なれども」全く知らないのも不都合である故、真名も筆のすさび程度に手習うがよいという。平安時代、女子の遊戯として「偏つぎ」があり、この遊戯を漢字の学習に役立てたと考えられるが、「紫式部日記」に「なでふ女の名書を読む、昔は経読むだに人は制しき」とある如く、仮名を女文字、女手として、その学習をすすめたのであるが、阿仏尼も同じ考えを中心に手習いを娘に指導している。「めのとさうし」には、「御手いかにもいかにも、うつくしくあそばし候へ、さりとてこなたかなたに、さのみにあそばし、御ちらかし候まじく候」「おさなき人などのかたことしたるぞ、あひらしくうつくしき、としおとなしく、なにのあやめもわくばかりの人となりて、すみにごひたるは見にくし」と、詳細に懇切に教えている。「身のかたみ」では「御手跡はことに女のたてたる御のうにて候、いかにもいかにも、そのすじ見ぐるしかるべきごとなきよう」、人に笑われんは残念なことである。「返たいかにも うつくしくあそばし候べく候」と、手習いを女の必修の学芸としているのである。近世におけるわが国一般庶民の教育「読み」「書き」「そろばん」の一つは、伝統的教科目といえるのである。

(3) 絵画について

「乳母のふみ」に「急はわざとたてたる御のうまでこそ候はずとも、人のかたちなどうつくしくかきならひて、物語ゑなど詞めづらしくつくり出で」物語絵など美しく描きたいものである。「しきし絵などもかゝせおはしましたらんこそ」のぞましいことであるとしている。鎌倉時代には、古典などを中心とした絵巻物の発展をみたのであるが、女性も気軽に物語の場面など即座に描ける程の技能をもつことが望ましいと教えている。室町時代には、平安・鎌倉時代の日本趣味の大和絵は全く振はず、宗・元の支那畫の影響をうけた画風が隆盛となり、雪舟、雪村、狩野元信・正信など、日本絵画史上代表的な人物の輩出をみたが、「めのとさうし」「身のかたみ」の二書では、絵画について一語もふれていない。源氏物語で、光源氏に育てられた若紫は、源氏と共に楽しそうに絵を学び、明石の上の姫君も母の描いた絵物語を手本に絵を学習している。総合合わせの遊戯は幼い頃からの上品な遊びとして行なわれ、自然に絵画に親しませたと考えられるが、室町時代に至っては女性の教養としての絵画は省みられなくなったと考えてよいであろう。

(4) 読物について

「乳母のふみ」には「さるべき物語ども、源氏おぼえさせ給はざらんは、むげなる事にて候(略)よくよく御覧じて、源氏をば、なんぎもくろくなどまで、こまかにさたすべき物にて候」また、「源氏、伊勢、その他の物語、字のあたるままに、よませ給ふまじく候」と、源氏などの読物は詳細に心して読ませ、娘の人生読本、教訓書とさせようとしていることが理解できる。当時一方には漢文学に興味をもった女性も多かったと桜井博士は説いている。⁹⁾「めのとさうし」に「この女ばうは、こきん、まんえふ、源氏、伊勢などをも読む人なり」と読物として好ましいものを挙げている。また、草子、物語を読むことについて「男のちかく候に、草子声御きかせあるまじく候、うたゑいじこゑなど、人にきかるは、はづかしき事なり」、公家女性の読書の仕方を具体的に教えている。「身のかたみ」には「物語さうしなどの事は、源氏ものがたり、

8) 桜井秀著「鎌倉時代の風俗」教養及思想の分化第一章京洛人士の修養(一)学芸教習の開始と年齢による。

9) 桜井秀著「鎌倉時代の風俗」生活定型及生活様式第七章女官生活とその背景による。

なりひらのくでんのほかのずいなうにするし候、げんじ物語は大かた和歌のはんかくとも見え候、(略)この物がたりにもるゝ事は候はず候、この物がたりを御らんじて、女ぼうのしんたい、御たちゐに御心がけ候べく候。「乳母のふみ」と共に、源氏物語を文学書としてのみでなく、女房の立居振舞を做うべく十分心して読み、内容を味わうべきであるとしている。源氏物語中の女性を理想として、これに倣わせようとしているものである。

(5) 音楽について

「乳母のふみ」に「御琴(七絃)びはなどは、ねんじてそこをきはめんとおぼしめし候へ」また、和琴(六絃)も少しは習うがよしとし、音楽は「いかにもはげませたまひて、上ずのなをもえんとおぼしめし候へ」と、中途半端な学習を戒めている。阿仏尼も娘紀の内侍も幼時よりさうの琴の名手であったという。紀の内侍について、「たゞさうのことを、とりわきあはれに思はしきものゝねにて、五の御年よりならはしめしに、ふしぎなるまで御ぎりやうさとく、七つにて御まいりの夜、院の御まへにてひかせおはしまし、また八の御としと覚へ候に、春宮の御琵琶にひきあはせまるらせ…」と述べているが、この類の人物は他にも少なくなかったという。「無名草子」に「びわはすべてひく人すくなく、まして女などはたまたまねぶをきくもいとめでたくゆかし」と述べていることから、鎌倉期には琵琶を学ぶ女性は多くなかったといえるようであるが、源平盛衰記においては琵琶の上手な女性を相当に挙げている。「めのとさうし」では「人のことのね、笛のねなどきこしめして、いかにも御きゝしり候とも、たれがふえのね、ことのねなど、人ひはんするとも」知った顔つきをせず、品よくひかえめの態度がよいと教えている。しかし芸事一般については「一期御すぎ候へ、末も通らぬは見ぐるし」。公家の娘といえども徹底して学習すべしと、阿仏尼と同様に論じていることは誠に適切な教訓である。「身のかたみ」でも「びわあそばされんに、よき御師えらばせ給、人の御みゝにとむらんばかり、あそばし候へ」「その事たらぬかなときかれんは」女の身として恥かしい事である。「御心のをよばん限り、御たしなみ候べく候」。三書共に音楽は徹底して学習せよと教えて

いるが、源氏物語「雨の夜の品定め」の中でも同一のことが語り合われている。音楽は時代を超越し、さらに洋の東西を問わず女性の教養として求められた学芸といえるであろう。

(6) たちぬいの道について

機織・染色とともに「たちぬふ」事は古代より女子特有の技術として高貴の人々も身につけることを望ましいとした。特にこの「たちぬいの道」を強調しているのは「めのとさうし」である。「御ぞたちぬふ事、いやしきわざにてあらず」と述べているが、裁縫に関しては「蜻蛉日記」「枕草子」にもみえ、源氏物語「簾木の巻」には「織り、染め、裁ち縫ふわざも優っているのがよい」とある。「落窪物語」では落窪の君が継母からたちぬいの道を習い、その技が非常に巧で遂に太政大臣の北の方に出世したことを記している。裁縫は生活上の必要のみでなく、女性の大切な教養と考えたといえる。「直垂したて候やうだい、御心得ありて、人にもおんをしへ候へ、まず左の袖のつゆを御さた候て、そののち袖をとりて紋をよく合せ、右のそでよりぬうものにて候、おほぐちは左のものだちよりぬい候。かやうの事よくよく御覚え候て、めしつかふ人にも御をしへあるべし、……あちこちとりまわしたるばかりにてかいしやうらしく」物ぬふさまをしらざれば、見にくきものにて候」「まづしたて物にみつてききあり、第一にははやくうつくしく、第二にはしたてはさほどなけれども、はやければ時のようにたち候、第三には、をせけれども、うつくしきをとる候」と、技の特徴を挙げて励ましている。「手のききたる女は、くわはうさいはひあるべし」ともいい、「男のいしやう見ぐるしきは、上下によらず女のはぢなり」「さぶらひは、馬の鞍ををくひまに、かみしも一具ぬはぬ女はあらじと也」とも戒めている。「御胸ひろふあき候事も、御ぞのしたてがらにて候」。さらに衣服着装上の注意並びに仕立て技術の留意点を詳細に教えて、忍耐と努力を要する技の習得を求めているのである。たちぬう道を女業とし、女子の修養とする考え方は、封建社会を通じて永く守られたことはよく知られる所である。

(7) 日常の行為について

石川謙博士は、中世の女子教育について、行儀作

法、美容法、表情法をも併せ教えたとしておられることは先に述べたが、これらの点に関して教訓書を見ることとする。

① 化粧

「女ぼうと申ものは、おほかたつくりものにて候、さてこそもろこしにも、花女・柳男とは、もちひて候へ、おとこはそのすがた、つくらずしてよきをほんとし、女ぼうはつくりてよきをほんとし候」（めのとさうし）とある。「めのとさうし」「身のかたみ」では目つき、口もと、眉づくり、髪かたち、ひたいの高さ、鼻、耳各々について説明し、その動き、表情、粧い方により美しさや品格が現われることを述べている。「御めは生れつきたるものにて候ほどに、おほきくも、ちいさくも、まなこはとにもあれ、うつくしう、のどやかに見なし候へば、おのづからうつくしきものにて候」（身のかたみ）「はなは人の顔のうちにさし出てたかく、めにたつものにて候、あひかまへて、あひかまへて、しろくおんけはひ候まじく候、さし出て見にくき物にこそ候」（めのとさうし）眉は唐の揚貴妃の如く、柳の眉が美しくてよいとしている。「身のかたみ」「御ひたいと申は、女のかほのちやう上に候へば、なりよくけしからず、たかきもうたてあり、あまりひきゝもしななし、ちとたかきかたよりたるが、男女ともに見よく候」（めのとさうし）知的なひたいは少し高めというのであろうか。「いかによき口つきも、おもふさまにゑみひらげ、のどのあな見え、したのひらき、口わきよりあはぶくたりてもいへば、いかにうつくしき口つきも、あしくなり候、またあしき口つきも、のどのどと物うち云、又おかしきことも、うちえみたる、にくからず」（めのとさうし）あくまで品よくあれと教えている。

② 衣服の着装について

「着物の着方、かんようは御ひきあはせに御心をへられ候ば、下はおのづからあき候まじく候」（身のかたみ）など、襟もと、裾さばき、帯の締め方等懇切に指導している。但し着物の柄・形などについては全く記述していない。

③ 朝昼夕の心得、その他日常の起居振舞について

朝、「いたづらにあさぶして、おきあがりて、かほのゆくゑもしらず、ほれまどいたるありさまみにく

し、おほどのごもりたるところに、御鏡をきて、あしたには御覽ぜよ、かほみずして、人にみえさせ給ふな」（身のかたみ）女性の身だしなみとして適切な教訓と考えられる。「ゆふべの事、日くるれば、ねんとばかり思ふこと、いとあさましき御ことにて候、（略）いりあいの鐘のをとにしょぎやうをしろしめせ」。おごるもの久しからず、深くわが身をかえりみて、夕には生死無常の理をよくよく思い廻らすべきであると訓しているのである。「ゆどのなどへ、御いで候はんをば、人に御見え候まじく候、あかはだかになる物にて候ほどに、御心せさせ候べく候」ほほえましい指導といえよう。つづいて「まづゆぶろなどにてたかごゑ、わらひごゑなど、せぬ事にて候」どこまでも床しさを求めている。「御しうとめなどには、いかほども御心ををき候へ」また、急に来訪せられた時も、御衣装を改め失礼のなきよう心得えよと「めのとさうし」では公家の娘としての品格と礼儀を守ることを教えている。御貝遊びあそびし候の作法として「わがまへをさしをき、人のまへにこゝろをかけなど候こと、わろく候」「そうぞうしくあるまじき事にて候」。楽しく行なわれたであろう情景が目に浮かぶと共に節度ある行為をよしとする一貫した教育をここにもみることができ。「御けんぶつなどは、あるまじき事とは申ながら、さるべき人などのさそひ給候はんとときなど」は別である。しかし「われこそはのてい」は深く慎しみ、謙虚であることが望ましいと教えている。香のたき方については、「めのとさうし」に「能く御心得候て、御たしなみ候へ」、「乳母のふみ」では、香の合わせ方により「人の御ほどをしはからるやうにおほしめし候へ」「さればとて我こそはとにくいけ」などあるまじきことで、何事も奥ゆかしい風情が大切とたしなめている。

(8) 宗教に関して

平安時代「極楽いぶかしくば、宇治の御寺をうやまえ」という諺の如く宇治の平等院鳳凰堂は地上の極楽とみられ、貴族は密教に目を暮したのである。しかし下級貴族慶滋保胤や横川の恵心僧都源心たちは、すでに浄土信仰を推進していた。鎌倉期に入り、浄土真宗、法華宗、禅宗などが庶民、武士階級において盛んとなり、社会教育上貢献するところが大きであった。公家

階級でも仏教は隆盛をつづけ、宗教は人間教育の基盤ともなったといえる。「乳母のふみ」では、動乱の世に生き、人生の苦しみの数々を経験した阿仏尼が、娘の幸福を念じて、「乳母のふみ」の後半多くの文字を並べ仏教に帰依すべきを説き教えている。「たのしみさかえても、いつまでか候はん」現世は仮の世、来世において暗き途をさまようことは悲しいことである。「まことにほとけの御心にかなひぬべきやうに、せさせ給ひ候べく候、うはべばかりの事は、わるく候也、おなじこともまことをいたし、心ざしをいたさねば、たのみありて、まことにはいたらぬ事に候なり」「いづれもおなじ御ほうにてこそ候へなどて、あれこれにかゝりたち候へば、心もちりて、一すぢにそまぬものにて候ぞ、かまへてかまへて、一かたにおぼしきため候へ、ゆるがずたじろがず、御心をおこさせたまひ候へ」。女の罪障深く、道に入りても、仏の教えを行なうことは困難とされるが、源氏物語「匂宮の巻」において、薫の君が母三の宮の入道生活の頼りなさを見ての感想として、「明け暮れ勤め給ふやうなめれど、はかもなくおほどき給へる女の御悟りの程に、蓮の露も明らかに玉と磨き給はむ事も難し」と述べている。そのため阿仏尼も「をこたりにく念仏だに候へば、わうじゃううたがひなく」とはいえ、「よくよく御こゝろえ候へ」と訓しているのである。また、法文を聞くについて、「いかなるひじり、よにきこえたかくて、かしこきありと申とも、むつびよりて、ほうもんきかんなど、なれちかづく御事返々あるまじく候」。如何なる場合にも女のなしなみを忘れてはならぬと論じている。「めのとさうし」に「御ぶつじなど、御さた候はゞ、いかにも、御心深く、おほしめして」執り行なうがよい。また、人無き所では法師などに物仰せられぬがよいと、僧と個人的に親しくするなどは思慮の浅い行為であるというのであらう。「身のかたみ」では、五十項目に及ぶ教訓の第四十九に「御物もうでの事繁くあるまじき事にて候」第五十「御ぶつじなどは、御心をいれて、一大事とおぼしめして、なにのたからも、めに見えぬわざとて、いかにとうたがはせ給ひそ、いかに

もいかにも、しんにいれて、御いとなみ候へ云々」「又さしてもなきそらほうしなど、御ちかづけ候まじく候、よきことはなきものにて候、御ぶつじなどにも、名だかき人を御くやうし候べく候」と述べている。深く仏道に通じた兼良であるが、「めのとさうし」とともに、仏教の教義は深く、容易に言葉につくせるものではないが、せめて家庭女性としては仏事、供養の心得を理解させようとしたと考えられる。教訓の結びに宗教問題をとりあげていることは、教育が宗教を一つの基盤としていることを意味すると考えられる。この点近代学校教育が宗教を排除して人間教育をすすめるとしていることとは大いに異るといえよう。

(9) おわりに

鎌倉・室町時代における公家の女子教育を当時の代表的女子教訓書を中心にみてきた。武家の興隆により政治経済両面の実力を失った公家は、さらに応仁の乱によって自らの邸宅も兵火にかかって焼失し、住む都は夕雲雀のあがるをみるようになった。落魄した公家たちは「乞食の如く」さ迷い、武人の横暴を「畜生の如し」と罵り、「言語同断の次第」と嘆くのみであったが、なお、公家たる誇りを捨てず、一方社会の現実を直視することを拒む態度をみせ、特に女子教育においては、教育の理想、内容、方法を平安時代の公家女性の教育の理想、内容、すすめ方に倣わせようとしたと考えられる。また、女性の地位について考えるに、室町期には嫡男長子単独相続が多くなり、女子の遺産相続権は殆ど消滅し、多くは経済的基盤をもたなくなった。婚姻方式では、平安末期新婦が行列美々しく夫の母方に迎えられる方式もみられたが、これに対して「明月記」に「心神不快にして之を見ず」と述べている程であるが、室町時代に入ると、公家も嫁入婚が多くなり、その上夫の死後も妻は夫への一方的な貞節を厳しく要求されることとなった。平安時代公家の女子教育の理想、内容については第一報で報告したが、今回とりあげた三書とも平安期の教育を典型とし、殊に源氏物語に登場する女性¹⁰⁾を鑑とし、その教育、学問に倣わせようとしつつも、その云うところは平安期に

10) 円満な知性と感情の持ち主、しかも明朗なうちに深い愛情を抱き学芸に秀でた理想の女性、「紫の上」。明るくつつましく謙虚な「玉鬘」。柔軟性と弾力性を統一する知的な優雅さをもつ「空蟬」。自己のプライドを貫き、しかも教養と礼儀を辨えた「権の君」。その他花散里など。

比べ強さ、厳しさが内在すると考える。「たとひひとのいみじう辛き御事候とも色に出てみえんは恥かしかりぬべきこと」「御みやづかひ候はゞ……をんななりともおしうのためにはいのちをもすてんとおぼしめされ候へ」「そうじて物を御すき候はゞ一期御すき候へ、なにとやらん、ひとさかりひとさかり御すき候て、末も通らぬは見にくし」など。姫君といえども甘えは許さぬと訓しているのである。このことは中世における女性の社会的地位、すなわち、平安時代の女性の如く、多くは邸蔭をも継承し、通婚方式や招婿婚の中で生涯を過したとは異り、いわゆる「三界に家なし」と云われる婚姻方式が多くなったこと等考え合わすとき当然厳しさが必要であったと思うのである。その上いかに世相を無視したとはいえ、「京鎌倉ヲコキヌゼ」た情勢が教訓の中にわづかながら反映していると考えられる。学芸の内容は、和歌、手習、音楽、読書を中心とし、室町時代の二書では、目、鼻、口などの化粧およびその品よき動きについて、また、朝夕の心

得、夫や姑に仕える態度、たちぬいの道など日常生活上の事項に関して詳細に教えているが、これらは公家から武家の女子に倣われ、さらに庶民一般に倣われ、やがて近世から近代にかけてのわが国女子教育史に大きな特徴づをなしたと考えても過言ではないであらう。しかし鎌倉・室町時代には、平安期の如く多くの優れた女流文学者の輩出をみることはなかったが、他の面で今日までその名を伝える女性が多い。たとえば、官女として強力な権力を持ち、社交的手腕をふるって、裏面工作により政治に参画した丹後局¹¹⁾、郷局¹²⁾、吉野時代の藤原康子¹³⁾など。また太平記にみる勾当内侍¹⁴⁾や辨内侍¹⁵⁾の如く才識豊かにして、しかも強い意志と貞操を貫いた女性らである。

総括して、当時の公家の女子教育が心の問題を重視し、人間性の教育を強く打ち出していることは注目すべきことであらう。これらの教訓書に依り、どれ程の女性が育成されたかは不明であるが、現在の学校教育を考えるに、知識偏重、科学万能の傾向がよくなる、人

- 11) 高階栄子、延暦寺執行澄雲の娘。初め相模守平業房に嫁して二男を生む。業房が清盛のために伊豆に流刑され、後白河法皇に仕えたが遂に懐胎して皇女を生む。彼女は美貌の上才気、澁淵法皇の思召しにかなった。常に法皇の傍らにあって政治的土台を築く。安德帝御入水のあと、彼女の意見に依り、高倉院第四皇子を多くの人の反対意見を斥けて天皇の位につけた。後鳥羽帝である。
- 12) 刑部卿藤原範兼の女。名は兼子。後鳥羽上皇の殊遇を受けた。その理由は上皇の御幼少から左右に侍して上皇の御気質や趣味を知り、巧みにそれに応じていく呼吸を解していた。上皇は多数の美男美女を寵愛せられたが、彼女はそのとりもちに手腕をふるった。政治的識見はなかったが、自己の栄達を主眼とした行動をとった。当時の公家は彼女の裏面工作により自己の栄達をはからうとし、彼女に賄賂することは、一つの慣例となっていた。藤原国道、実宜、教成、公清など彼女の力によって出世した。定家も彼女の力により従三位に昇叙せられたという。
- 13) 藤原公廉の女、才色兼備の女性、後醍醐天皇の寵を蒙り准后として（新待賢門院）皇后を凌ぐ勢力をもち国政に参与した。また雑訴にまで口を挟み、の准后御入口があれば勲功なき者も賞を得、理のあるものも非となる風があったと伝えられる。天皇が隠岐に遷行せられた時は唯一人の女性としてつき添った。建武の中興なるや彼女の威権は更に加はり、政治にも一段と参与した。彼女の生みまいらせた義良親王が後村上天皇として即位せられた。
- 14) 太平記によれば頭大夫行房の女。内侍として後醍醐天皇に仕えた。義貞にその美しさを認められ天皇は義貞に内侍を賜わった。義貞戦死の報を聞くや若くて尼となり嵯峨の往生院で静かに義貞の冥福を祈った。
- 15) 吉野の名花。右小辨藤原俊基の女。父は後醍醐天皇の討幕の挙に加わり、事頭われて鎌倉で殺された。長じて後村上天皇に仕えた。美貌と才識をもって知られた。高師直が彼女を奪わんとし時正行が見つけ、行宮に送りとどけた。天皇は正行の功を賞して彼女を賜わった。正行は「とても世にながらふべくもあらぬ身の、かりの契をいかで結ばん」と一句を残して拝辞した。しかし彼女は勅によって正行を夫としたもの。影ながら仕えることを忘れず、正行四条畷に戦死の報を聞くや、直ちに黒髪を下して、正行の冥福を祈った。

間教育の場の不足を感じるのは不当であらうか。人間としてより価値ある生き方をするためには家庭教育においても、学校教育においても豊かな人間性の育成をさらに意識的に行なうべきではないかと考えるのである。

参 考 文 献

源氏物語 日本古典文学大系
 日本歴史(上) 井上 清著
 鎌倉時代の風俗(日本風俗史講座) 桜井 秀著
 室町時代の風俗(日本風俗史講座) 魚澄惣五郎著
 乳母のふみ(日本教育文庫女訓篇) 阿仏尼著

めのとさうし(日本教育文庫女訓篇) 著者不詳
 身のかたみ(日本教育文庫女訓篇) 一条兼良著
 小夜のねざめ(日本教育文庫女訓篇) 一条兼良著
 十訓抄詳解 石橋尚宝著 萩野由之関
 太平記 日本古典文学大系
 無名草子評解 富倉徳次郎著
 日本教育通史 尾形裕康著
 日本女子教育史 志賀 匡著
 日本文化史Ⅲ 鎌倉時代 辻 善之助著
 日本文化史Ⅳ 吉野室町時代 } 辻善之助著
 安土桃山時代 }

Summary

Since Yoritomo established Bakufu, a feudal government, at Kamakura in the 3rd year of Kenkyu, in the reign of Emperor Gotoba (1192), Bushi, the warrior class, were invited and they, in place of the nobles, assumed the political control of the people.

In Kamakura Era, commerce and industry were made remarkable progress and the common people gained economic power and by and by established their own social status. Thus Kuge began to lose political power and subsequently economic control also and they sustained their life by teaching learning and accomplishments. Above all, they paid much attention to the education of their younger generation.

In the middle ages, Kuge considered the girls, education of Heian nobility as their ideal. This is obvious in the textbooks for girls' education in those days.

This time, I chiefly studied the following three well-known books: *Ubanofumi*, *Menotososhi* and *Minokatami*.

In reference to the women's education in ancient and middle ages Dr. Ken Ishikawa says, "They placed emphasis on how unmarried girls should be. Therefore, they used to teach good manners, adequate mental attitude and various accomplishments and together with them beauty art and facial expressions." All the three books seem to consider the women depicted in the *Stories of Genji* as their ideal and practical suggestions are described in detail for adequate mental attitude and other things such as Dr. Ishikawa explained.

But in the middle ages there were few famous female writers compared with those in Heian period, though there were number of influential women taking part in the politics.